



## エルヴィーラ・ルオッコの回想録 (by Elvira Ruocco)

### 第6章

#### アレーゼにてスタート

#### アレーゼにてスタート

私のようなアルフィスタにとって、ボルテッロを去りアレーゼに行くということが何を意味するのかは、前章まで呼んでいただいた方々にはイメージしていただけると思います。仕事を始める前に、わたしはクルマで下見に行きました。アレーゼでわたしが感動したのは、技術センターの建物で、建築家イニャツィオ・ガルデッラ（ジェノヴァの名家だがミラノ出身）の美しい代表作のひとつでした。後年、歴史アーカイブ設立のための仕事中に技術センターに関する膨大な資料が出てきたことがありました。その中には技術特徴を記した資料や、インテリアの図面が含まれていて、Abitare Segesta（アビターレ・セジェスタ）により編集された書籍”Alfa Romeo. Il progetto di Architettura”（アルファ・ロメオ 建築プロジェクト）にそのうちの多くが紹介されています。

技術センターに対しては、効率化を考慮した素晴らしい建築だという印象を持ちました。よく建物を見るにつれ、次第にその印象は実感に変わり、その建物は背後に控える、様々な大きさの格納庫で構成された工場に通じる大きなドアの役目を負っているという確信に変わっていきました。サービスの骨格を形成するがごとく、縦方向に交差する外部ブリッジに接続され、各部門とオフィス間の迅速なコミュニケーションを容易にしていました。残念ながら今日、それらの跡は見る事が出来ず、廃却されてしまいましたが。

技術センターはわたしの新しい職場ではありませんでした。数キロ手前の Silo（シロ）タワーの後ろで、夜間高速道路から見える大きな Alfa Romeo という筆記体のネオンのある、管理センターで仕事を始めることになりました。

アレーゼでの初日は今でもよく覚えています。それは、長い間その日を待ちわびたからという理由だけではなく、わたしが何をしなければならないのかを早く知りたかったからでもありました。環境の変化があるときはいつもそうになってしまうのですが、前の夜もやはり眠れませんでした。朝 7:30 に技術センターのゲートを訪ねると、名前は忘れましたが、あるパーソナル・マネージャーと短い面談をしました。面談中にわたしは家の都合で朝 8時から夕方 5時までしか勤務できないことを伝え、わたしは 4階 C ブロックにある商用車部門のオフィスに通されました。そこで、わたしの新しい上司であるエンジニア、Parmeggiani（パルメッジャーニ）氏に紹介されました。そんな折、商用車部門を含むセールス部門のトップ、Enrico Sala（エンリコ・サーラ）氏にもお目にかかる機会を得ました。とてもフレンドリーに挨拶をさせていただき、わたしはホッと、落ち着くことが出来ました。何年もたつと、そんなサーラ氏との従属関係もお互いをリスペクトする関係になり、アルファを去った今日でもその関係は変わっていません。



モダンで大きな採光窓がもたらす明るいオフィスからはムゼオ（アルファロメオ博物館）を見渡すことが出来ました。わたしはさまざまな拠点に車両を配属する職場のマネージャー Apino（アピーノ）さんに付き添って仕事をすることになりました。わたしの業務は、Pomigliano（ポミリアーノ）工場にて生産される車両のテクニカルスペックを作成し、ファックスにて送信するというものでした。それは絶え間なく繰り返される、あまり刺激がある仕事ではありませんでしたが、避けられない事情もあり、約 1 年後に新たな職場への変更希望を出すことになりました。

これについては、また次回お話しすることにしましょう。

[Elvira Ruocco](#)